

編集後記

光彩13号をお届けします。1月の合同シンポジウムにおける総会と新しく提案されたビームライン建設が主な内容です。最初の10本に加えて、昨年9月に締め切られた次の10本の陣容が見えてくるのももうすぐと思われます。すると直ぐ「そのSGに提案の内容を順次書いてもらえば、原稿集めに苦勞しなくても済む（光彩は薄くならなくて済む）」と考えてしまいます。さて、利用者懇談会の広報誌として光彩創刊号が1993年（平成5年）に発刊になってからもう3年半が経過しました。辻前編集幹事（慶大）と2年、圓山現編集幹事（岡山大）と1年余。今内容を見返しますと勿論蓄積リングという実体のない時期のこと、「やるぞやるぞ」の掛け声の集大成です。しかし、今やSPring-8建設が軌道に乗り、推進母体のJASRIの陣容が整って来てSPring-8に関する情報発信体制が整えられつつある今、光彩は一つの岐路に立っているように思えます。純然たる懇談会の内部広報誌がJASRIから発せられる情報誌「SPring-8利用者情報誌」とどう折り合っていくかそろそろ議論を煮詰める時期に来ているからです。勿論、融合するか独自の情報誌を持つかのどちらへ行くかは会員全員の意志によって決まりますが、最も重要な点は会員のいろいろな意見が（批判的な意見も含めて）素直に懇談会内に伝わる紙面が保証されうるか否かだと思います。次の広報誌のあり方のたたき台を作るのは次期編集幹事をお願いしたいところです。思い返すと編集作業ではいろいろなことがありました。原稿依頼したとたん「どうして私が書かなければいけないのか？」と詰問されたこと、阪神大震災の直後の交通が途絶えた中を原付でJASRIのあったポートアイランドに駆けつけ、JASRIの西播磨移転のどさくさの中で編集作業を行ったこと、その中でテキパキと対処してくれた稲垣前事務局長のことなどが思い出されます。

難波 孝夫

光彩13号を発行して、季刊となった1年が過ぎました。年3回から1回増えただけでも、発行周期が4ヶ月から3ヶ月に短くなり、ホッとする間もなく次の編集作業がやってくる感じです。さて、本号では新たに「11本日以降を目指して」と「新サブグループの紹介」を企画しました。前者によって、第2期共用ビームラインの計画を会員の皆さんに紹介して頂くことは有意義なことと考えます。最初の10本が今秋から供用開始となるに当たって、次の陣容も大変関心のあることと思うからです。ところで、SPring-8（だけでなく、播磨科学公園都市）を訪れる度に、様々な建設工事の進捗と夜間の明かりの増加に驚かされます。既に狐狸の里では無く、人間の住む環境が急速に整いつつあることを実感します。遠からず、多くの研究者の生活の場となるはずです。この様なフェーズに対応する「光彩」の姿を考えると、1月の総会での菊田会長の提案は現実味を帯びたものと成ってきます。

圓山 裕

「光彩」 No. 13

1997年3月発行

発行 SPring-8利用者懇談会
〒678-12 兵庫県赤穂郡上郡町金出地1503-1
(財)高輝度光科学研究センター内
TEL 07915-8-0970 FAX 07915-8-0975

印刷 アイテム ジャパン
〒658 兵庫県神戸市東灘区深江本町3-1-6
TEL 078-413-5400 FAX 078-413-5335